

ホウレンソウ タネバエについて



図1 幼虫による被害



図2 幼虫



図3 成虫

1 生態

タネバエ（ハナバエ科）は、ホウレンソウのほか各種野菜及び豆類を加害する。

成虫は体長約5～6mmの小さいハエで、体色は灰色～褐色と個体差が大きい。耕起後間もない湿り気がある畑に好んで集まり、有機質肥料や未熟堆肥などに含まれる臭気物質にも誘引される。

成虫の発生は年4～6回、越冬世代成虫の発生は平坦地で3月、高冷地で4月頃より見られる。成虫の寿命は半月～4か月と長い。暖地では成虫、幼虫、蛹の各態で、寒地では蛹態で越冬する。

産卵は、主に湿気を帯びた土塊間で行い、およそ、5～6日で孵化する。1雌当たりの生涯産卵数は数個～1000個と個体差が大きい。幼虫は白色～乳白色のウジで、土中に潜んで有機物や膨軟となった種子や根部を食べて成長する。播種後間もない種子や、発芽したばかりの幼苗の地際部に食入し加害するため、不発芽や立枯れ症状が発生する。幼虫期間は約2週間であり、蛹化は加害植物付近の土中で行い、羽化するまでの期間は20℃で7～14日である。

2 発生状況

成虫の寿命が半月～4か月と長く、世代が混在することから発消長はやや不明瞭になる。高冷地のハウレンソウ栽培では、5～7月及び9月播種の作型で被害が大きい。盛夏期は活動を休止するため（夏眠）、密度が低くなる。

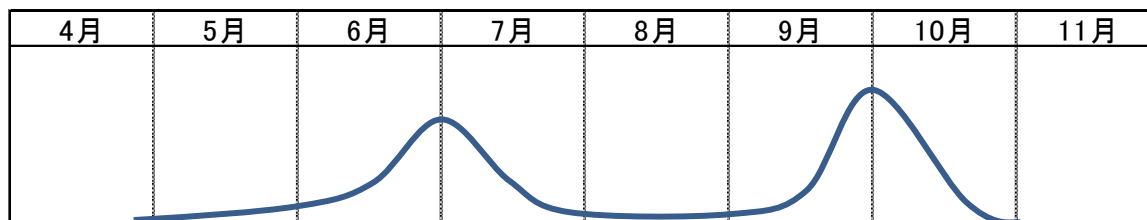


図4 誘引物質での発消長

3 防除対策

(1) 耕種的防除

雨よけ栽培では目合い1mm以下の防虫ネットを開口部に展張し、ハウス内への侵入を防止する。
誘引源となる有機質肥料や未熟堆肥の施用は避ける。

(2) 薬剤による防除

播種時に粒剤を施用する。